

「不安を勇氣に転じるCAP」

エンパワメント・センター主宰 森田ゆり



CAPかながわ創立20周年おめでとう。CAPを通して出会えた喜びと感謝と連帯の心を贈ります。

丸いちから

いのちの力はまるい 地球、太陽、木の年輪、虹、太鼓も血球も
いのちの力はまるく動く 波紋も磁場も水滴も サークルに、スパイラルに。
生きる力はまるい
人権とは、生きる力 安心 自信 自由 の まるい力
安心 自信 自由は いのちを育てるスリーステップ。
無条件の受容 安心
自分への自信をつける働きかけ 自信
自分で選択することへの働きかけ 自由

CAPは1960年代から始まった女性への暴力を社会問題化するシスターフッドの運動を担った人々のちからで誕生しました。その運動が世界の児童福祉分野に対して、性的虐待を虐待の定義の中に含めることを主張し、それを実現させたのです。

1998年に来日したジュディス・ハーマン（「心的外傷と回復」の著者）は500人以上の聴衆を前にした東京講演を締めくくるスライドで、カトリックの尼僧たちと、ノーブラのフェミニストたちが手をつないでマーチするスライドを見せました。そして「このような女性たちのムーブメントが生み出したプログラムです」と、CAPプログラムのテキストの表紙写真を大写しにして見せ、「このプログラムこそ必要」と言ってスピーチを終えました。CAPは、生徒が路上でレイプされたカトリックの小学校の先生（尼僧）が、 coronバスのレイプクライシスセンター（ラディカルフェミニスト）に子ども向けのプログラムの提供を頼んだことから開発されたのでした。このダイバーシティが素晴らしい！！

日本のCAP20周年

1985年 初めて日本のマスコミにCAPを紹介しました。同年、ナイロビでの第二回国際女性会議で、CAPの創設メンバーの一人のサリー・クーパーと一緒に、CAPを世界に向けて初めて紹介しました。

日本での実施を望む強い声が、海を越えて当時米国に住んでいた私のところに届くようになるには、それから10年の年月が必要でした。

その10年間とは、日本で子どもの権利条約批准の運動が盛んになり、子どもへの人権理解が進んだ時期でした。同時に1980年代の末から、児童福祉分野での虐待への認識が生まれつつあった時期でもありました。CAPが日本で始まった背景には、この二つの社会的土壌の成長があったのです。

1994年名古屋で大河内清輝君（13歳）がいじめを苦しんで遺書を残して自殺しました。今すぐにもCAP養成講座を開いてほしいとの強い要望が日本から届きました。養成講座の内容を固めるために1年の準備期間をもらいました。

1995年夏、東京、大阪、広島で第一回目のCAP養成講座開催。その年の内にくつのもCAPグループが誕生。それからは、CAPは燎原の火の如くに全国に広がっていき、2008年には159グループが誕生しました。

99年2000年には、朝日新聞と毎日新聞がそれぞれ全国版の社説でCAPをとりあげ、どちらも安心、自信、自由の人権概念の基本と、子どもが内に持つ力を引き出すエンパワメントのアプローチを高く評価しました。

02年には国会で国会議員10人と議員秘書30人らにCAPの体験学習を行いました。それを報道した朝日新聞

全国版の記事はこんな文で結ばれていました。

「いじめられる子を助ける友達を演じた社民党の「たかこ」ちゃんは、迫力たっぷりで爆笑に包まれた。（中略）
自民党の河村建夫議員は「CAPを全国の学校に広めよう」と力をこめた。」

04年の改正児童虐待防止法には、学校の役割を定める条文がいくつも新設されました。

5条3では、「学校及び児童福祉施設は、児童及び保護者に対して、児童虐待の防止のための教育または啓発に努めなければならない」という新条文が定められた。この条文には与党調整案の段階では「CAPプログラムなどを想定」という説明文がついていました。CAPの実践への評価が国の法律を変えたのです。

06年には、衆議院特別委員会の参考人として森田が意見陳述をする中で、国会の中で議員たちを対象にCAPの特別な叫び声の講習をしました。その後も国会議員対象の「性犯罪から子どもを守る」というテーマで講演後、議員たちに模擬CAPワークショップに子ども役で参加してもらいました。

「どうすると危険か」を学ぶのではなく、「どうしたら安心か」を学ぶことによって、はじめて人は自分の中の不安を減少させ、自分の中に安心を育てることができることを体験してもらいました。

はやり、すたりの消費文化とマスコミは、人々を表面的な新しさの憧れへとさそう。新しい危険回避プログラムが次々と登場しています。CAPスペシャリストは、老舗の貴録とその内実の深さを示すに足る自己研さんと学びを続けましょう。

CAPは使えば使うほど味が出て、手に取ってみる視点を変えることに新しい発見の喜びがあるプログラムです。それは一つの物をとにも使い続けた人々の人生の歴史がしみこんでいる骨董品のように、思想が息づいている道具なのです。（「子どもが会う犯罪と暴力～防犯対策の幻想～」森田ゆり著 NHK新書 より）

不安があおられ、憲法の理念が大きな危機に見舞われている時代に、今こそが人権理念を中心にすえたCAPプログラムの正念場。CAPを単なる防犯技術講習プログラムに貶めないでください。

わたしは、そしておそらく皆さんも社会への不安を勇氣へと転換するダイナミックな方法の見事な結晶が、このプログラムに内在するからこそ続けてきたのです。

CAPは大きな社会変革への熱い願いから生まれたプログラムであり、その願いの方法論化に成功したプログラムです。

日本は世界で最も広く、多くCAPが行われている国です。CAPスペシャリストの数も世界一です。

2016年3月段階で、全国で17万9百回のワークショップが開催され、520万人+の人々がCAPワークショップを受講しました。その内大人は196万人、子どもは324万人です。

スペシャリストの数は2500人から3000人です。

CAPスペシャリストに感謝！

日本のCAPはすごい!! 全国のCAPスペシャリストに感謝の拍手！ スペシャリストを支えてくれる学校、施設、行政の関係者たちに感謝！

この人たちが、大人併せて520万人にワークショップを届けてきたのです。何千人もの子どもたちの訴える不安や恐れによりそってきたのです。何百人の子どもたちを危機の只中から救い出すきっかけとなってきたのです。

「わたしに安心、自信、自由の権利があるなんて、初めて知りました。ありがとう、ありがとう、ありがとうCAP」と言ってぼろぼろ涙を流す子どもと大人に、わたしたちはいったいどれほど出遭ってきたことでしょうか。CAPで習っていたために、誘拐や性被害を免れた子どものケースに、喜びをかみしめたことが何度あったのでしょうか。

不安が組織化され、人々をして強い政治権力を求めるようにしむける社会の動きに対し、CAPスペシャリストや支援者は、肥大化する不安の組織化の状況に対して、わたしたち一人一人の内に安心を育てることこそが、人権文化の創造であることを伝えてきましょう。